

## 6 シュードモナス製剤を用いたトマト根腐萎凋病、青枯病の同時防除

### ねらいと成果

トマト半促成栽培（4～7月どり）は、栽培前～中期において根腐萎凋病が、後期に青枯病が発生しやすい栽培型である。そこで、シュードモナス製剤（製品名：セル苗元気）を用い、両菌株を定着させた苗の根腐萎凋病及び青枯病に対する連続的な防除効果を検討した。その結果、両病害について発生抑制効果を示し、長期間にわたる効果の持続が確認された。

### 内容

シュードモナス製剤を充填したセルトレイにトマト品種「ハウス桃太郎」を2001年11月26日に播種した。ガラス温室内で育苗後2002年2月21日に根腐萎凋病及び青枯病の両病害汚染ほ場に定植した。対照薬剤は、クロルピクリン剤を定植2ヶ月前に処理した。根腐萎凋病は3月8日から病勢進展が緩慢になった6月18日に、青枯病は7月16日まで発病調査を行い、茎部の褐変程度は5段階に分けて7月26日に調査した。根腐萎凋病及び青枯病の発病株率、茎

部の褐変程度は、シュードモナス製剤区：4.0%、38.9%、15、クロルピクリン処理区：13.6、93.7、2.8、無処理：16.2、77.4、2.6であった。シュードモナス製剤区の防除価は根腐萎凋病75.3、青枯病49.7で、茎部の褐変程度も軽く、両病害に対して連続的な防除効果が認められた（図1）。

### 普及上の注意事項

本剤は培土の形となった生物農薬である。トマト以外の作物の苗作りには利用できないので注意する。

相野 公孝（農業技セ・病害虫防除部）

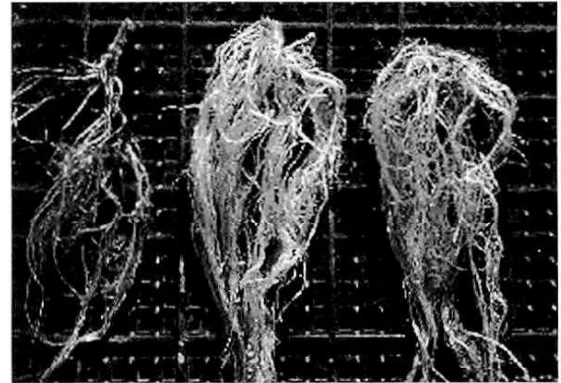


図2 根腐萎凋病による根部褐変（左：無処理、中央：シュードモナス製剤、右：クロルピクリン処理）

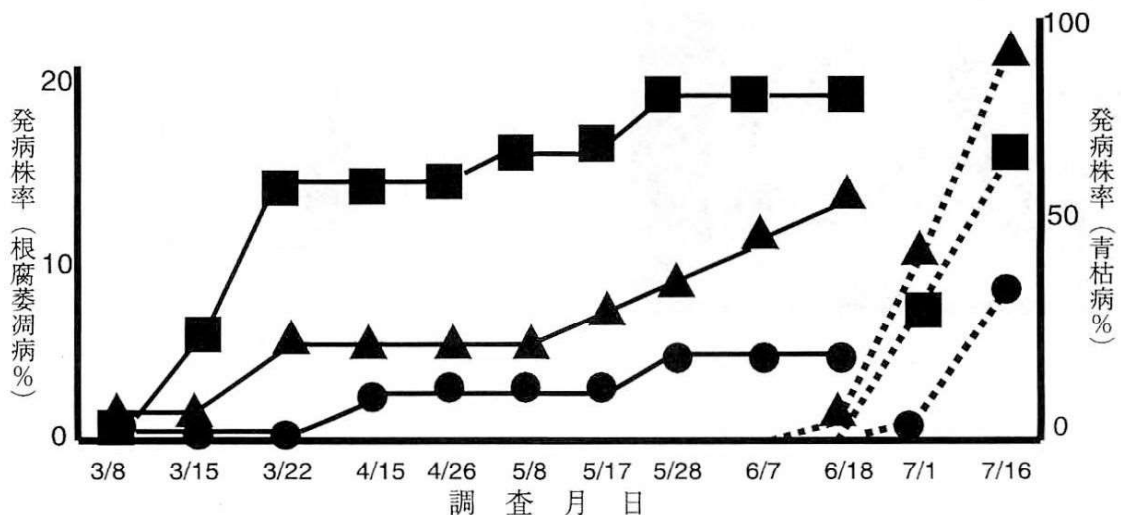


図1 トマト根腐萎凋病及び青枯病の連続的防除効果

●：シュードモナス製剤(根腐萎凋病) ▲：クロルピクリン ■：無処理  
 ———：根腐萎凋病 .....：青枯病